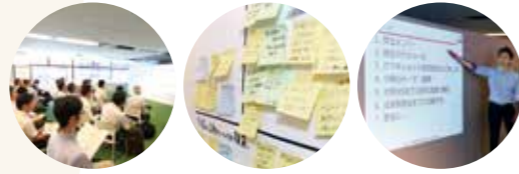


企業IT力 向上研究会



ITEG コミュニティを通じた 学びと実践の場作りを

IT活用のためのプラクティスを研究・共有することを目的に、2008年に発足した「企業IT力向上研究会 (ITEG)」。

当初はITRのユーザー会的な位置づけとしてスタートしたITEGだが、設立から10年を迎え、現在はオープン参加の会費制任意団体として活動している。

単なる情報交換にとどまらず、実践的な成果物の作成を重視するというユニークな特徴を持つITEGについて、理事を務めるセゾン情報システムズの情報システム部長 高橋秀治氏に、その意義や今後の活動の方向性について聞いた。

名称：企業IT力向上研究会 (ITEG)
 運営形態：会費制の任意団体
 設立：2008年7月
 活動目的：実行可能なプラクティス(手法、プロセス、利用技術など)を調査・研究し、その成果を共有し、実践することで、企業の競争力に加えて日本の国際競争力の向上に貢献する
 参加企業数：41社(2018年7月時点)
 URL：https://www.itr.co.jp/company/iteg.html



ITRが事務局を務める企業IT力向上研究会 (ITEG)で理事を務めるセゾン情報システムズ 情報システム部長の高橋秀治氏。氏は、ITEGへの参加が、IT部門の社内での地位向上に寄与していると力説する
 photo by Keiji Kaneda

「信頼されるIT部門」に

セゾン情報システムズの情報システム部長を務める高橋秀治氏がITEGに入会したのは、2015年のことである。前職時代の同僚からの誘いを受け、当初は一時的な体験のつもりで参加したという。テーマごとに設置されている複数の研究部会にひと通り参加した結果、「異なる価値観をもつ人たちの集まりであること」(高橋氏)に魅力を感じ、以来、活動に深く関わっている。2017年からはITEGの理事に就任。部下であるITスタッフたちにも活動への参加を奨励している。

高橋氏がここ数年、一貫して重視しているテーマがある。改革の実践者として「IT部門が信頼を得る」ことである。既存のルーティン業務を繰り返しているだけでは、いずれ組織としての存在意義が失われるというのが氏の持論である。

「ITの重要性がこれだけ指摘されてい

ながら、いざ変革を行うとなったときに、経営者が信頼してIT部門に仕事を任せられるという企業は少ないのではないかと。事実、私たちがそうだった。IT部門の価値をどうしたらV字回復できるか。そのヒントを得る場として、ITEGには大きな可能性があると感じている」(高橋氏)

スタッフの視野の拡大や 価値観の変化に期待

ITEGでは、テーマごとに複数の研究部会(2018年は計7部会)が設置され、各部会単位で毎年1月から年間を通して活動が展開される。各部会の活動内容は6月の中間報告、11月の最終報告を通して、ITEGの全メンバーに共有される仕組みである。参加にあたって、ユーザー、ベンダーの垣根は特になく、成果物づくりに「積極的に汗を流せる」ことがある

種の条件となっている。

高橋氏は、特定のテーマで集まる異業種のメンバーが、年間を通して継続的に活動を行うことが、IT人材の視野を広げるうえで極めて有効だと力説する。

「社内に閉じこもっていると、IT部門はどうしてもサービスプロバイダーであるという自覚を失いがちになる。しかし、ITEGに参加することで、スタッフたちの意識は明らかに変わった。各部会の成果物には改革のヒントがいくらかもある。また、他社の取り組みを知るなかで、自分たちが抱えている課題やその背景にある構図が共通しているということにも気づいたようだ。利害関係のない者同士の集いだからこそ得られる学びがある」(高橋氏)

現に高橋氏は、ITEGの活動によって得られた成果物や他社の事例を積極的に社内で試すことを信条としており、その結果として事業部門からの信頼を徐々に

勝ち取っていることを実感しているという。それを象徴しているのが、IT部門のリソース配分の変化だという。

「3年前、当社のIT部門のリソースの実に95%以上は既存システムの維持に費やされていた。その割合が今では30%以下に減り、逆に新規のチャレンジを大幅に増やせるようになった。そのきっかけがITEGによってもたらされたことは確かだ。また、自分たちの経験を再びITEGにフィードバックすることで、より確固たる自信を得ることもできている」(高橋氏)

ITEGは、住人自身が 運営するマンション

現在、ITEGの理事の1人でもある高橋氏は、今後の活動の方向性について、参加者個々の自主性を特に重視したい考えだ。

「ITEGというのはある意味マンション

のようなもの。私の役割もまたマンションの管理組合の理事と同じだと考えている。せっかくITRに場を提供してもらっているのだから、そこで自分たちがどうしたいのか、あるいは何ができるのかを、“住人”である自分たち自身で考えていくべきだと考えている」(高橋氏)

高橋氏は、ITEGのような自主的に運営される情報交換の場の重要性は、これからのIT業界においてさらに高くなると見ている。というのも、サービス化が進む企業ITの世界において、適切な技術を利用するためには、経験の共有がより重要になると考えているからだ。

「従来のように機能比較に時間をかけて最良のモノを買い取るといった時代はすでに終わった。そのようにモノの売り買いの価値観が変わってくると、体感に基づくユーザーの評価が極めて大きな影響力を持つようになる。これからは、情報のつながりによってサービスを選んで

いく時代がやってくるだろう。ITEGが目指している自主的な実践の場づくりは、これからの時代に大きな意義を持つはずだ」(高橋氏)

高橋氏は、今後に向けて、数多くの企業に参加を呼びかけたいとしている。また、ベンダー企業の参加も大いに歓迎するという。中立的なコミュニティを通して、ユーザーとベンダーの双方が新たな価値を生み出せる場づくりが可能だと考えているためである。氏は、悩める企業のIT担当者にご呼びかける。

「まずはITEGという場を体感してもらいたい。自分たちの会社の中や、外部のセミナーなどでは学べないことがそこにあるということがわかりただけははずだ。また、IT部門の変革を目標とする方であれば、ぜひ複数のスタッフを参加させることをお奨めしたい。学びや気づきの速度が増し、得られた成果物を実践に移しやすくなるだろう」